

「未来の社会科学ユーザ」として
現代社会学部の学びを高校生と共有する
—— 「人が生きるつながりを作る」入門演習としての
単位先行型高大連携授業の実践から ——

相 澤 真 一

『中京大学現代社会学部紀要』 第9巻 第2号 抜 刷

2016年3月 PP. 23-46

「未来の社会科学ユーザ」として 現代社会学部の学びを高校生と共有する

——「人が生きるつながりを作る」入門演習としての
単位先行型高大連携授業の実践から——

相 澤 真 一

1. はじめに——高校教育における「人が生きるつながりを作る」 学びの構想

「現代社会学部というのが一体何をしているのか、よくわからない」

このような問いかけは、しばしば学外あるいは学部外の人々から出てくる疑問である。このような疑問は、人文社会科学の知のあり方が問われている昨今、社会科学の一分野である社会学に対して、「社会学が何ができるか」について、端的に問われる問いであると言えよう。

この問いに対する答えをそれぞれに持てるようにするべく、中京大学現代社会学部では、2015年度より、全体の学びを共有する目標として「人が生きるつながりを作る」を掲げた4専攻制を実施している。すなわち、現代社会学部の社会学学習の任務として、社会学という学問の営みがこれまで「人が生きるつながり」を解明してきたことを、社会学の学習を通じて創り出せることを実感できる「アクティブラーニング」(松下ほか編2015)として、教育カリキュラムのなかに取り込むことをイメージした教育を取り込んでいる。本稿では、「人が生きるつながりを作る」ための学

習を創り出す場として、大学の社会学教育がいかなる貢献をしようのか、特に社会調査教育の実践からその可能性を示していく。

既に、著者らは、このような「人が生きるつながりを作る」アクティブラーニングの教育実践が社会科学の一分野である社会学の実践にとどまることなく、「未来の社会科学ユーザを育てる」教育実践として構想した研究事業を開始し（相澤 2014b）、そのような教育開発研究事業の一環として、「社会調査実習」を中学3年生に2014年9月から10月に1ヶ月以上かけて実施し、教育実践として遂行できることを示してきた（児玉ほか 2015）。児玉ほか（2015）で示した実践では、独立変数、従属変数のような社会における関係性の存在を中学校の生徒たちが理解し、生徒たちが翌年の学園祭で独自の調査票調査を独自に行なえるほどの教育効果をもたらすことはできた。しかしながら、中学3年生の学習指導要領で定められた公民100時間のうち、社会調査の授業に12時間（年間授業回数の10分の1以上）を割くこととなり、また、そのほとんどの回に愛知県の大学教員が京都市の高校に足を運んで授業を行ない、スタッフが徹夜作業による準備を行なったこともあった点で、その後の「持続可能性」や「応用可能性」に大きな疑問を残した実践となったことは確かである。

そこで、次の課題として浮かび上がったのは、中等教育段階のカリキュラムに無理なく位置づく形で、高校段階において「未来の社会科学ユーザを育てる」実践を行なうことであった。そして、中等教育段階までの静態的な社会観に基づいた社会科学の基礎知識としての社会科学学習から、その先にある動態としての社会関係を把握する、すなわち「人が生きるつながり」を実感できる社会学学習（相澤 2014a）を、できればアクティブラーニングの学習形態によって行なうことが次の目標課題となった。

このような授業実践を行なう場として、本稿は、2015年度春学期（高校生にとっては1学期）に、中京大学附属中京高等学校の3年生を対象とした単位認定型先行授業で行なった実践を取り上げる。学校法人梅村学園を母体とする中京大学と中京大学附属中京高等学校では、2013年度より

「中京大学附属中京高等学校の生徒に対する「単位認定型先行授業」に関する中京大学との覚書」に基づき、高校3年生の1学期の木曜日5・6時限(大学における3時限)の「総合的な学習の時間」に大学の専任教育職員が授業を実施することにより、相互に教育内容の理解を深めるための活動を一層促進し、高校生自らの大学への進学意欲を向上させる授業を行なっている。この授業の機会を活用することにより、上記の問題意識を応用した教育実践の開発を行なうことを企図した。本稿は、以上の問題関心に基づき、2015年度の春学期に、筆者がこの単位認定型先行授業で行なった「調査研究法」の教育実践報告である。

2. 「人が生きるつながり」の学習の場を作り出すための理論枠組 ——センゲほか『学習する学校』から

詳細の実践報告は第3節以降に述べることとして、このような教育実践が研究および理論潮流としてどう位置づくかを少し検討してみよう。本稿が理論枠組として依拠するのは、ピーター・M・センゲらによる『学習する学校』である(センゲほか訳書2014)。ピーター・M・センゲは敢えて分類するならば経営学者であり、マネジメントに関する理論家であり、さまざまな分野で協働を行なう実践家でもある。センゲは『学習する組織』(センゲ訳書2011)において、組織における学習のあり方を論じ、そのうえで、本節で取り上げた『学習する学校』において、原著の副題に示すように「教育者、保護者、教育に関わるすべての人々に対するフィールドブック」として、多種多様な実践を報告しながら「学習」を生み出す場としての学校教育の可能性を扱っている。

このように、学習の社会的考察にあたり、経営学者の議論を導入するのは、学習についての社会的関心および教育社会的関心が必ずしも高いとはいえない状況がある。今から20年以上も前に教育社会学者

の荻谷剛彦が日本教育学会誌『教育学研究』において、学習に関する社会学的関心が高くないことを示している（荻谷 1993）。これに対して、荻谷自身がその後「学習資本」などの概念を扱いながら、学習に関する社会学的考察を深めようとはしているものの（荻谷 2008）、あくまで実証研究のなかでの分析概念の一つとして組み入れたものにとどまっており、学習資本の形成過程や学習資本の内実に対して立ち入った検討が行なわれている訳ではない。これらの点については、筆者が中学校段階における「学習可能性」について、戦後直後から 1960 年代までの歴史的変容については論じてきたものの（相澤 2009）、センゲほか（訳書 2014）の訳書の副題についているような「未来の学びを創造する」ような検討が社会学のなかで行なわれてきたとは言いがたい。そこで、本節は、このような「学習の社会学」の不在状況に対して、センゲの解説による社会学的研究の可能性を析出する。

センゲは、とりわけ子どもの学習に対して、極めて社会学的な言明をさまざまに提示している。例えば、次のような言明を提示している。

子どもとは継続して学び続けるものであり、学習は毎日の生きた状況の中で起き、学習を支える制度は社会の働きに統合されている、ということだ。（センゲほか訳書 2014： 111）

ところが、センゲは、学校とりわけ産業化時代の学校や学習がこのような形で行なわれてこなかったことを極めて批判的な立場から扱っている。センゲの「産業化時代のモデル」は簡単に確認すれば次のようにまとめられる。すなわち「産業化時代の学校についての考え方」では、学校は次のような言明を前提としたモデルとしてまとめられる。

- ①学校は管理を維持する専門家によって運営される
- ②知識は本質的にバラバラに分節化される

- ③学校は「真実」を伝達する
- ④学習は個人的なもので、競争が学習を加速する
(センゲほか訳書 2014: 82-90 より該当箇所を抽出)

また、このなかで「産業化時代の学習についての考え方」では、学習は次のような言明を前提としたモデルとして批判的にまとめられている。

- ①子どもは「欠陥品」であり、学校は子どもを「修理」する
- ②学習は頭の中で起きるもので、身体全体で起きるものではない
- ③誰もが同じ方法で学ぶ、または学ばねばならない
- ④学習は教室の中で行われ、世界で行われるものではない
- ⑤「できる子」と「できない子」がいる
(センゲほか訳書 2014: 67-81 より該当箇所を抽出)

これらの批判は、学校教育に関する研究に詳しいものであれば、フォーコー(訳書 1977) やイリッチ(訳書 1977) とほぼ同型であることはすぐに気づくであろう。これらの批判だけを取り上げるのであれば、センゲをここで取り上げる意義はない。彼を取り上げる意義が真に存在するのは、これらの現状を踏まえて、『学習する組織』から繰り返し示されているように「学習」がいかに生み出されるかを提示しているところにある。センゲは、組織学習の核となる「基本理念」として次の3つを掲げている。

- ・すべての組織はメンバーの考えと相互作用の産物である。
- ・学習とはつながりである。
- ・学習はビジョンによって引き起こされる。

(センゲほか訳書 2014: 44-48 より該当箇所を抽出)

これらの言明からはっきりとわかるのは、近年、日本の高校教育および大学教育で積極的に叫ばれている「アクティブラーニング」と述べる以前

に、そもそもセンゲによれば「自明の真実」として、組織学習とは、メンバー同士の動的な活動をもって構成されていると提示されているのである。そして、センゲはこの「自明の真実」に基づき、「まず、学習の対象が記憶されるべき固定した事実ではなく、生きた、変化し続けるものとして扱われるようになれば、学習のプロセスも生き生きしたものになるだろう。」(センゲほか訳書 2014: 104) と述べながら、組織学習を行なう組織としての「『生きたシステム』としての学校」のあり方を提案している。センゲが「生きたシステム」としての学校として重視しているのは以下の3点である。

- ・教育プロセスに関わる一人ひとりの「自分が使う理論」を常に振り返る
- ・子どもや大人にとって意味のある学習経験のために異なる教科をどう統合できるかと工夫し続ける
- ・学校を形成する人々(教員、生徒、保護者)を一つのコミュニティと見なし、健全なコミュニティを築くために友人や家族やさまざまな異なる機関を結ぶ社会関係のウェブ(クモの巣)に教育を再統合しはじめる。(センゲほか訳書 2014: 106)

また、「生きたシステム」としての学校の教育プロセスとして重視しているのは以下の3点である。

- ・教員中心の学習ではなく、生徒中心の学習である
- ・同質性ではなく、多様性を奨励する
- ・事実を記憶して正しい答を求めるのではなく、相互依存と変化の世界を理解する(センゲほか訳書 2014: 106)

これらの提案は「未来の社会科学ユーザを育てる」ための教育実践の一

つとして、社会調査の実践を導入することを考えてきた我々のこれまでの実践に示唆を与えるだけでなく、社会学の学部教育を、組織学習を生み出す「生きたシステム」として位置づけていく上でも非常に示唆に富んだ言明であろう。そして、このような組織学習を組織に埋め込むことによって、どのような社会関係が編成され、そこにどのような社会的効果をもたらされるのかは、「学習の社会学」として興味深い課題になりうると言えよう。これらの提案を踏まえて、第3節では実践内容を報告し、今回の実践がどの程度応えられているかの反省的考察を第4節にて確認する。

3. 単位認定型先行授業「調査研究法」の授業実践報告

——「未来の社会科学ユーザを育てる」組織学習を生み出すことに向けて

3-1 授業実践全体の流れ

今回、実践内容を報告するのは、第1節でも紹介したように、中京大学附属中京高等学校の3年生を対象とした単位認定型先行授業である。この授業で何をテーマとした授業を行なうかは、入学後に認定される科目も含めて、各教員に委ねられている。今回は、児玉ほか(2015)の反省に基づいた実践を行なうことおよび筆者が現代社会学部にて「社会調査入門」および「社会調査実習」の授業を担当していることを踏まえ、「調査研究法」として、1年間4単位をもって行なわれている「社会調査実習」の短縮版を行なうことを企画した。実施した授業内容は以下の通りである。なお、アシスタントとして、中京大学社会学研究科博士課程の堀兼大朗氏に可能な限り、毎回の授業に来てもらった。受講者は5名で全員女子生徒であった。

第1回(4/9)オリエンテーション

第2回(4/16)報告書の輪読と調査してみたいテーマを考える

第3回(4/23)仮説を議論して深めた上で、図書館で調べてみよう

- 第4回 (4/30) 仮説と質問文を考える
- 第5回 (5/7) 仮説と質問文の再検討①
- 第6回 (5/14) 仮説と質問文の再検討②
- 第7回 (5/21) 実査の準備と入力の実施／授業後、調査の実施を兼ねて
豊田キャンパス見学
(5/28) 校内行事のため休講、その間に各教室にて調査を実施。
- 第8回 (6/4) 入力されたデータを分析してみる
- 第9回 (6/11) 分析を進めて、自分たちの仮説を確認していこう
- 第10回 (6/18) 自分たちの分析結果についてスライドを作っていこう
(6/25) 校内行事のため休講。
- 第11回 (7/2) お互いのスライドを確認しよう＋友達に聞いてみたいこ
とを確認しよう
- 第12回 (7/9) インタビューしてみたことをまとめて、スライドを完成
させよう
- 第13回 (7/16) 成果報告会 (中京大学附属中京高等学校にて)

なお、参考までに掲げれば、2014年9月から10月に洛星中学校の3年生を対象とした授業内容は以下の通りであった。

第1回	講義 「社会科学」とは何か?
第2回	講義 独立変数と従属変数、仮説の生成①
第3回	仮説の生成②
第4回	質問文の作成①
第5回	質問文の作成②
第6回	講義 尺度と分析手法、調査票の最終確認
文化祭	アンケート配布・回収 (1200部)
第7回	入力作業 (3クラス)

第8回	Excel の操作方法、分析①
第9回	分析②、プレゼンテーション準備①
第10回	プレゼンテーション準備② *2クラスはさらにもう1時間
第11回	分析結果報告会
第12回	講義 サンプルと母集団

(児玉ほか 2015 より再掲)

この2つの授業を実施してみて共通点として見出される点がいくつかある。まず、仮に授業時間が50分であったとしても、90分であったとしても、一定水準の調査票を作成するためには、5回程度をかける必要があることである。生徒たちが社会科学における「独立変数」、「従属変数」といった考え方を理解し、単なる数の分布ではなく、関係性を明らかにすることが社会科学の統計調査の関心にあることを理解して、実践すること、および、それを質問文にしていくことには、少なくとも1回、作ったものを検討しあうトライアンドエラーのプロセスが必要であると言える。もちろん、例えば、集中講義で行なう場合にはこれらの作業を授業中に行ない、すぐに反省的検討を行なったうえで、もう一度作り直す、ということも可能であろう。しかしながら、ここで受講者たちが形あるものを作り出してみるというプロセスを学びの過程に取り入れることが必要であるというのが改めて浮かび上がる。同様のことは、分析やプレゼンテーションの準備にも言えよう。どちらも分析およびプレゼンテーションの作成に2回ずつを要している。

3-2 各授業における実践報告

今回の授業実践では、最初に実際に調査を行なう前に具体的なイメージを持ってもらうために、筆者が中京大学現代社会学部にて担当している「社会調査実習」の2014年度の報告書『「東海圏の高校生の生活と意識についての調査」報告書』の輪読を行なった。偶然であるものの、非常に都合のよかった点が2点あった。1点は、2014年度の調査が高校3年生を対象としたものだったため、自分たちの生活世界がどのように調査研究になりうるのかが極めて把握しやすい対象であったことである。もう1点は、この報告書が学生の論文が5章構成だったため、5名の受講者が1人1章ずつ担当して、報告書全体を読むことができ、調査の内容全体に対して、報告書がどのように作成されているのかのイメージを共有することができた点である。報告書については、「良いと思った点や読んで勉強になった点を3点挙げる」、「疑問に思った点や違うのではないかと思った点を3点挙げる」、「読んでみた上での感想を1段落（200字程度）で書く」、「自分たちが調査するときはこうしてみたいと思ったことを2点以上挙げる」の4点を課題として提出してもらった。すなわち、この報告書を読んだ上で、自分たちの生活について、どのような仮説が立てられるかを考えるところから仮説の検討を開始した。この最初の課題について、大変優れた内容が提出されたことは、本授業を勢いづける大きな要因となった¹。

仮説の検討を開始すると共に、受講生徒たちの反応を見ながら決めたのが調査対象である。社会調査を通じて社会のなかの関係性を明らかにするためには比較対照を行なうことが必要である。そこで、彼らの所属する中京大学附属中京高等学校の生徒の内部での違いに着目するか（例えば、校

¹ なお、これらの優れた感想として提出された600字から800字程度の文章をスマートフォンのフリック入力で行っていたこと、および、キーボード入力よりもその方が速いという事実を知ったことはデジタルメディアの普及とデジタルネイティブとそれに先行する世代の違いとしてさまざまに考えさせられた。

内での男女の比較や進学クラス／特進クラスの比較など）、それとも校外に対象を求めるかについては、生徒たちで仮説を立てながら議論を行なった。その結果、高校生と大学生（中京大学現代社会学部の学生）の比較調査を行なうこととした。



写真1 授業風景「調査票を作成する」

中京大学現代社会学部「調査研究法」(担当:相澤真一) 整理番号XXXXX
高校生と大学生の生活と意識に関するアンケート

・このアンケートは、中京大学附属中高等学校の3年生が仮説を立ててアンケート調査を実施し、**資料・分析する「調査研究法」の授業の一環として行うもの**です。高校生と大学生の暮らしに、自分の生活や考えと比べてみることで興味を持ちます。
 ・**個人情報は必ずおぼえください。**おぼえたくない情報は隠さなくてもかまいません。あなたの考えにもっとも近いものを選んでください。必ずつけてください。
 ・個人が特定されないように調査・分析いたします。また調査データは保護者向けにしません。

■では、早速、質問に入ります。あなたの現在の生活についてお答えください■

■1 あなたの現在の住居の形態はどの程度満足していますか。必ずお答えください。
 1 満足していない 2 ほぼ満足している 3 満足している(1)

■2 あなたの現在の住居の形態はどの程度満足していますか。必ずお答えください。
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

■3 現在の学級活動時間はどの程度ですか。90分未満を想定して12までお答えください。
 1 4時間未満 2 4時間 3 5時間 4 6時間 5 7時間 6 8時間 7 9時間 8 10時間以上

■4 現在の学級活動時間はどの程度ですか。90分未満を想定して12までお答えください。
 1 4時間未満 2 4時間 3 5時間 4 6時間 5 7時間 6 8時間 7 9時間 8 10時間以上

■5 あなたは、今年度、以下のことを主として学習しておられると考えています。もし、複数や当てはまらない場合は、「なし」をお答えください。(必ずお答えください)

	なし	1	2	3	4	5	6	7
① 英語の学習	0	1	2	3	4	5	6	7
② 数学の学習	0	1	2	3	4	5	6	7
③ 外国語の学習	0	1	2	3	4	5	6	7
④ 読書の学習	0	1	2	3	4	5	6	7

■6 あなたが自分自身が行くべき分野をどの程度考えていますか。12までお答えください。
 1 経済 (1000-5000) 2 文芸 (6000-8000) 3 工学 (9000-11000) 4 看護 (12000-14000)
 5 情報科学 (15000-17000) 6 農学 (18000-20000) 7 産 (21000-23000)

■7 あなたがインターネットで読むべき分野はどの程度ですか。12までお答えください。
 1 高度な学問 2 最新の学問 3 最新の学問 4 最新の学問 5 最新の学問
 6 最新の学問 7 最新の学問 8 最新の学問 9 最新の学問 10 最新の学問 11 最新の学問 12 最新の学問

写真2 出来上がった調査票

その後、写真1にもあるような様子で、それぞれが考えてきたアイデアを電子黒板に写しながら、紙資料を配布し、それを議論しながら授業を進めた。また、大学で授業を行なっている利点を生かすために、1回は大学図書館の使い方の紹介を行ない、また、大学図書館やデータベースを使った文献検索も含めた実践を行なった。その結果、5月半ばの5月14日の授業では、4ページからなる写真2のような調査票が概ね固まった。5月下旬に、高校生を対象とした調査については、受講生徒たちの所属するクラスで学級活動やホームルームの時間などを用いて実施してもらった。幸運にも5名の受講生が4クラスに分かれていたため、4クラス150名強の

調査票を回収することができた。大学生を対象とした調査については、大学になじんだ2年生以上を対象とすることに決め、筆者が担当する2年生以上を対象とした講義1クラス(50名受講)のほか、5月21日に3時限の授業終了後、キャンパス間スクールバスに乗り、名古屋キャンパスから豊田キャンパスに移動し、木曜4時限に授業を行なっている先生の授業をお邪魔させてもらい、受講生徒たち自身によって配布回収を行なった。その結果、以下の表1にまとめられる数の調査票を回収した。高校生と大学生で性別の比率がかなり異なるものの、「社会調査実習」として分析を行なう上では十分な数を回収することができた。

表1 回収した票数のまとめ

	男	女	不明	合計
高校生	54	90	2	146
大学生	92	64	0	156
合計	146	154	2	302



写真3 授業風景「データを入力する」

なお、入力については、写真3のように、全員が入力を行なったものの、授業時間数および5名という受講生の数を鑑みて、授業1回分で入力できたもの以外は、筆者がしばしば入力を委託する業者に依頼した。

データ作成後は、児玉ほか(2015)の実践を生かし、Excelのピボットテーブルを用いたクロス表を作成する授業を行なった。統計的検定の授業は行なわず、明確に差異を見られるものをグラフ化するという形で、生徒たちと議論を行ないながら進めた。非常に熱心な生徒たちで、写真4のように、授業後に教室から場所を変えて、分析やスライド作成の相談を受けることもしばしばあった。写真4で真ん中に写っているのは、児玉ほか(2015)の授業実践を中学校側として受け入れてくれた児玉英靖である。このような形で、時には来客も交えながら分析を進めていった。最終報告

は、報告書の文章の体裁をとるのではなく、口頭発表を行なうことを想定して、パワーポイントによるスライドを作成した。極めて熱心に取り組んでもらえた結果、6月4日のデータ配布から2週間後の6月18日の授業後には、概ね発表ができる程度のスライドを作成することができた。



写真4 授業後の風景「分析してスライドを作成する」

量的調査で基本的な発表の構造を完成させた上で、今回の授業実践では「なぜ、そのような関係があったのか」をインタビュー調査を通じて確認することを試みた。このアンケート調査とインタビュー調査の両者の分析結果をまとめたものが表2である。

表2 発表テーマおよびアンケート調査とインタビュー調査による分析結果まとめ

発表テーマ	アンケート調査で明らかになった結果の要約	インタビュー調査で調べてみたこと
高校生と大学生の睡眠	高校生より、大学生のほうが就寝時間が遅く、特に一人暮らしの大学生は就寝時間が遅い	高校生たちにインタビューし、一人暮らしをしたら遅く寝るか尋ねたところ、ほとんどの人が肯定。

<p>高校生と大学生のコンビニの利用頻度</p>	<p>高校生よりも、大学生のほうが1週間にコンビニに行く回数が多い。また高校生は夕方に500円未満のお菓子を買いに行くことが多い。</p>	<p>高校生が500円未満程度しかコンビニで使わないのは、「そんなにお金を使いたくないから」。カロリーは気にするが、食べたいので結局買ってしまう。</p>
<p>高校生と大学生のお金の使い方について</p>	<p>高校生よりも、大学生のほうがお金の使い方が計画的であるものの、大学生のほうが今の収入に満足していない人が多い。</p>	<p>アルバイトをしている高校生にインタビューした結果、彼らが「卒業後のために貯金をしている」、「収入には満足していない」ことがわかった。</p>
<p>高校生と大学生のスケジュール管理について</p>	<p>高校生はスケジュール管理に何も使わない人が多い一方、大学生の6割が紙の手帳を使う。部活で忙しい人はスケジュール管理をしない人が多い。</p>	<p>部活を週6日以上している高校生にインタビューした結果、「スケジュール管理の必要がない」などのある声があることがわかった。</p>
<p>高校生と大学生の将来の夢に対する意識の差</p>	<p>高校生と大学生の間では、「将来就きたい職業があるか」という質問では差がなかったものの、就きたい仕事に向けて行動している人は大学生のほうが多かった。</p>	<p>高校生と大学生をインタビューすることにより、大学生は高校生より現実的な将来像を持っているのではないかと考えられる。</p>

表2からわかるように、アンケート調査で明らかになった高校生と大学生の違いを、一步深めて分析する機会をインタビュー調査が与えることになった。インタビュー調査はあくまで補足的なものであり、サンプリングなども全く考慮に入れたものではなかったが、受講生徒たちが自分たちの発見を深め、自分の発表スライドの内容を充実させる上では、かなり効果があったように見られた。

そして、これらの活動の集大成として、担当者から教務課を通じて附属高校に提案する形で、成果報告会の開催を申し入れた。高校の先生方も快諾してくださり、7月16日の最終回の授業は、場所を中京大学名古屋キャンパスから中京大学附属中京高等学校に移し、成果報告会を開催した。成果報告会には、附属高校の大竹有二校長および伊神勝彦前校長の両先生をはじめ、高校・大学両者から数多くの方に足を運んでもらったなかで、成果を報告することができた。この様子は「【高大連携】単位先行型授業校内発表を実施」として、中京大学附属中京高等学校のホームページ (<http://www.chukyo.ed.jp/2010-03-03-07-31-35/642-2015-07-22-05-46-16.html>) に掲載されている。

このなかで、非常に印象に残った質疑応答を一つ紹介しよう。発表後の全体の議論のなかで、「高校の勉強と大学の勉強の違い」について答えた時に、受講生徒から「高校の勉強は教科書に書いてあることを覚えればいいのに対して、大学の勉強は教科書に書いていないことを考えることにあるのだということがわかった」という趣旨の発言があった。このようなことを直接的に授業で伝えてきた訳ではなかったので若干驚いたものの、仮説、独立変数、従属変数といった概念に基づいて、社会の関係を考えることにより、社会というものを動的に捉えられるようになることを、生徒たちが主体的に理解したことを実感した瞬間であった。この発言に象徴されるように、社会調査教育を通じて「未来の社会科学ユーザを育てる」という試みをまず一つの形としてできたのではないかと考えている。

なお、これは後に報告を受けたのみのことであるので、詳しいことは十

分知らないものの、今回の受講生徒が、高校の学校説明会にて学校体育館で行なわれた全体会にて、この成果報告会の内容を発表したとのことである。

4. 教育実践の反省的考察

第3節で示した教育実践報告を、再度、センゲに立ち返って検討してみよう。センゲが組織学習のできる「生きたシステム」としての学校において、教育プロセスとして重視しているのは以下の3点であった。

- ・ 教員中心の学習ではなく、生徒中心の学習である
- ・ 同質性ではなく、多様性を奨励する
- ・ 事実を記憶して正しい答を求めるのではなく、相互依存と変化の世界を理解する（センゲほか訳書 2014: 106）

4-1 組織学習としての考察①「教員中心の学習ではなく、生徒中心の学習である」

これらの点がどの程度、今回の授業実践においてできたかを考察してみよう。第1の「教員中心の学習ではなく、生徒中心の学習である」は、一見すれば、生徒たちが調査対象と質問項目を決め、分析を進め、スライドを作成したという点で、生徒中心の学習ができたと考えられる。一方で、このように数多くの新しいことを学習する上では、しばしば教員側の先導が必要になることがある。「生徒中心」で行なったように見えたとしても、実際には教員がほとんど方向付けていることすらありうる。そこで「教員中心」と「生徒中心」の関係をどのような移行プロセスとして理解すべきかは、センゲが「共有ビジョンの構築」として掲げた5段階のプロセスが

参考になる。センゲは、共有ビジョンが構築される過程を「第1段階 命令」、「第2段階 売り込み」、「第3段階 テスト」、「第4段階 相談」、「第5段階 共創」に分けている。第1段階、第2段階は端的に言えば、「学習してほしい内容を命令する段階」、「学習してほしい内容を、学ぶといひことがあると売り込む段階」である。これに対して、第3段階以降は、少しずつ、受け取り手の能動性が発揮されてくる。第3段階では、生徒自身が学習内容を「使ってみる」ことにより、「テスト」される。さらに、第4段階では、産業化時代の学校が想定するような「学校は「真実」を伝達する」姿勢ではなく、答えを考える相談を持ちかける段階に到達する。そして、第5段階に至ると、教員が中心となった学習させようとする必要から、生徒が学習しようとする内容を共に創り上げていく段階へと移行していく。

このような形で見た場合、一般社団法人社会調査協会が定める標準カリキュラムのなかでの社会調査の学習は、第1段階から第3段階を講義して修得した上で、第4段階を社会調査実習へと至る道筋を作っている。これに対して、今回報告した実践は、第1段階から第3段階で教えるべき内容を最小限にしなから、第4段階の「相談」を持ちかける授業形態であった。これは実際に授業実践を進める上では、実は見えない2つの賭けをしている。1つは、教えるべき内容を最小限にすることにより、学習内容自体を矮小化しないかどうか、という点である。もう1つは、「相談」しあえる関係を授業のなかで構築できるか否かという点である。今回の実践は、後者については、同じ高校の3年生で、同じクラス同士になったこともある生徒たちが多くいたので、大きな問題はなかった。前者については、危険性を承知しつつ、敢えて「大学の授業では扱っているものの、教わっていないこと」があることを認識してもらうことにより、大学での学習意欲につながられないか、という考えのもと、授業を行なった。この点は、「高校生自らの大学への進学意欲を向上させる」という「先行授業」の目的にも基づいたものであると言える²。

以上、見るように、この「相談」の段階を組み込んだ授業として「生徒中心の授業」を行なうことにより、実りある学習を志した点は概ね予想通りの成果を納めたと考えている。しかしながら、センゲの「共創」の段階に至ることができたかどうかについては、個人差があったことは否定できない。すなわち、自分の立てた仮説、行なった分析を、センゲが「コンピュータを使ったり図書館に行ったり、その分野に詳しい人にインタビューをしたり」（センゲ訳書 2014: 152）と自分の設定した学習課題に対して、積極的な行動を起こしたかどうかは、生徒たちに何う限りでも若干の個人差があったことは確かであった。この点については、むしろこの段階まで到達した生徒たちが数名いたことを前向きな成果として捉えながら、今後、さらなる改善を検討していきたいと考える。

4-2 組織学習としての考察②「同質性ではなく、多様性を奨励する」

第2の「同質性ではなく、多様性を奨励する」という観点から、今回の教育実践を反省的に考察してみよう。今回実施した調査は、生徒たちの想像力からスタートしながら、高校生と大学生の生活や意識を比較してみることにあった、ここで想定されている課題は2つある。1つは、大学生という近い将来自分もなる存在ながらまだ未知である存在が、どういう生活をしていて、どういうことを考えてみるのかを、想像することにある。もう1つは、自分の高校生としてのリアリティが他の人々にあてはまるのかを、高校生自身についての仮説を考えたり、調査したりすることによって、再帰的に検討してみることである。このように社会調査というのは、その

² なお、センゲは「「命令」と「相談」は同時にしないこと」と戒めている（センゲほか訳書 2014: 150）。すなわち、「あなたが自分で「正しい」と思うビジョンを人々に示しつつ「皆さんはこれについてどう思いますか」と聞いたところで無関心な返答しか出てこないだろう」（センゲほか訳書 2014: 150）ということである。これは、アクティブラーニングとして主体的な学習を目指す授業形態を行なう上で重要な指摘であると言えよう。

営みの根本に同質性の発見ではなく、自分とは異なる存在の社会的なあり方を発見することがある。生徒たちが当初立てた仮説に対しても、「採択」／「棄却」という言葉を使って、自分たちの想像が合っていたのか、それとも違ったのかを最後の発表スライドで明確にするように示し、そのように作成してもらった。そして、その理由を考える上で補助となるインタビュー調査の実施も併用したのが今回の実践である。このうち、仮説がなぜ合っていたのか、合っていなかったのか、とりわけ、仮説が合っていなかった時に、なぜそれが合っていなかったのかを言語化する作業は、自身が知らなかった多様性に受講生自身が触れる瞬間である。このような観点で見た場合、動態的な社会関係を理解しようとする実践の一環として、社会調査を実習させてみる授業は、多様性に触れるという点で大きな意義のある実践であると言える。

一方で、社会調査の授業における多様性の奨励において、気をつけなければならないこともある。それは、調査を進めていくうちに、固定したメンバーで議論し続けることによって、そのメンバーのなかでの同質性が高まり、メンバー以外の人々が持っている多様性に気づかなくなるという点である。今回の授業では、前出の児玉氏の来訪や成果報告会の実施などで、多様性をさらに奨励する機会を設けることができたものの、これは多様性を調査しようとする授業実践全般において、注意しなければならない点であると言える。

4-3 組織学習としての考察③「事実を記憶して正しい答を求めるのではなく、相互依存と変化の世界を理解する」

第3の「事実を記憶して正しい答を求めるのではなく、相互依存と変化の世界を理解する」という観点から、今回の教育実践を反省的に考察してみよう。この点は「産業化時代の学校についての考え方」に基づいた社会科教育を受けていれば受けているほど、考えを改めないと理解できない点

である。そこで、児玉ほか（2015）の実践も踏まえて、仮説を立てて予測を立ててみることを強く意識した授業実践を行ってきた。最終的な結果として、このような仮説を用いた調査を企画、遂行、分析する作法になじむことはできたように感じている。その端的な成果は、第3節の最後に示した生徒の発言からもうかがえよう。

ただし、一点、さらに社会認識の深まりを考える上で、一步先の課題があることを挙げよう。それは、自身の仮説創出の相互依存性をさらに強く自覚することにより、仮説を立てるという営み自体について、さまざまな調査研究を踏まえて再帰的プロセスを踏めるようになる必要があることである。すなわち、ただの思いつきで仮説を立てるのではなく、仮説自体をさまざまな調査研究を読み解くことにより紡ぎ出し、また調査を進めることによって、さらに深めていくといった再帰的なプロセスが踏めるようになることがより上級の課題では求められることであろう。これは単なる「未来の社会科学ユーザ」ではなく、「未来の社会科学のヘビーユーザ」となっていく上では、必要な学習過程である。この点を組織学習していくことが、おそらく高等教育段階の課題の一つと位置づけられよう。一方で、必要性自体には中等教育段階で気づける可能性がありうることは今回の実践および児玉ほか（2015）で学んだことである。

4-4 反省的考察のまとめ——「生きたシステム」としての学校のあり方に言及しながら

以上、「生きたシステム」としての学校の教育プロセスとして重視している3点と照合しながら、教育実践の反省的考察を行ってきた。この反省的考察のまとめとして、教育プロセスの段階からさらに広がりのある文脈として、第2節で提示した「生きたシステム」としての学校のあり方と今回の実践報告とを簡単に比較することにより考察をまとめよう。センゲが「生きたシステム」としての学校のあり方として掲げたのは以下の点で

あった。

- ・教育プロセスに関わる一人ひとりの「自分が使う理論」を常に振り返る
- ・子どもや大人にとって意味のある学習経験のために異なる教科をどう統合できるかと工夫し続ける
- ・学校を形成する人々(教員、生徒、保護者)を一つのコミュニティと見なし、健全なコミュニティを築くために友人や家族やさまざまな異なる機関を結ぶ社会関係のウェット(クモの巣)に教育を再統合しはじめる。(センゲほか訳書 2014: 106)

これらの言明のうち、今回、とりわけ強く意識させられたのは、「学校を形成する人々(教員、生徒、保護者)を一つのコミュニティと見なし、健全なコミュニティを築くために友人や家族やさまざまな異なる機関を結ぶ社会関係のウェット(クモの巣)に教育を再統合しはじめる」という点であった。すなわち、社会調査を実践してみることにより、「人が生きるつながりを作る」教育を作り出していくという点であった。

従来の「産業化時代の学校についての考え方」の一つには、「学校は管理を維持する専門家によって運営される」ものであり、「学習は個人的なもので、競争が学習を加速する」という考え方があったように、従来の学習は、生徒個人によって行なわれるものであり、そこに他者が立ち入ることはタブーのように考えられることも多かった。一方、今回の授業では、疑問に感じたことを、積極的に参加する生徒ほど、その理由を保護者や家族、友人、知人に尋ねてくることにより、仮説や分析内容を精選させていった。これは、筆者自身が授業で指示したわけではなかったものではなかったもので、むしろいささかの驚きを感じさせるものであった。すなわち、動態的な社会関係を前提とした社会科学を学んでいくことにより、「健全なコミュニティを築くために友人や家族やさまざまな異なる機関を結ぶ社会

関係のウェッブ（クモの巣）に教育を再統合しはじめる」ことを筆者自身が気づかされたのである。

5. 結論

以上、本稿では、筆者が2015年度春学期に単位認定型先行授業で行なった「調査研究法」の教育実践報告を中心としながら、そこにピーター・センゲの「組織学習」にかかわる議論を参照することにより、最終的に、社会調査を実践させる教育が、現代社会学部が2015年度より目標として掲げる「人が生きるつながりを作る」教育の営みの一つとして大きな役割を果たせる可能性があることを示してきた。また、これは一学部教育目標のみならず、社会の可変性を社会調査を通じて教えること、また学べるようになることを目的とした教育を推進することにより、「未来の社会科学ユーザ」を育てるという社会科学教育全般にわたる目標へと展開できる可能性があること並びに高校側からも高い関心を寄せられているアクティブラーニングの充実に寄与できる可能性を示すことができたと言えよう。もちろん更なる教育の改善として考慮すべき点が多いことは議論を俟たないものの、単なる技術論に陥らない社会科学教育の入門として社会調査教育を位置づけられることを最後に確認して本稿を閉じたい。

【付記】今回の教育実践は、文部科学省科学研究費補助事業（挑戦的萌芽、課題番号 26590101）「未来の社会科学ユーザを育てるためのカリキュラム構築：社会学系学部の学部教育から」（研究代表者：相澤真一）の助成を受けて実施されたものである。本実践の実施にあたり、調査実施や成果報告会の便宜を図ってくださった中京大学附属中京高等学校の先生方、中京大学名古屋キャンパス教務課の職員の方々および通常の研究事業とは異なる授業実践の展開をサポートしてくださった中京大学現代社会学部事務室

および研究支援課の皆様、そして、アシスタントを務めてくれた堀兼大朗氏(中京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)に記して感謝を申し上げます。また、熱心に受講して下さった中京大学附属中京高等学校の履修者の皆さんにとって何かの形で役立ったことを祈念しながら、記して感謝を申し上げたい。

文献

- 相澤真一, 2009, 『戦後教育における学習可能性をめぐる言論の変容過程——新制中学校の黎明期から1960年代までの教育運動を中心とした歴史社会的研究』東京大学教育学研究科博士後期課程学位論文。
- , 2014a, 「大学教育における社会学の学習と中等教育段階の社会科教育法——財界へのインタビュー調査を手がかりにした接続可能性の検討」『中京大学現代社会学部紀要』第7巻第2号, pp.43-68.
- , 2014b, 「未来の社会科学ユーザを育てるためのカリキュラム構築: 社会学系学部の学部教育から」『科学研究費助成事業データベース』<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/26590101.ja.html>(最終取得日2016年1月20日)。
- Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la Prison*, Paris: Éditions Gallimard. (=1977, 田村俣訳『<監獄>の誕生——監視と処罰』新潮社。)
- Illich, Ivan, 1970, *Deschooling Society*, Harper and Row, New York. (=1977, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社。
- 荻谷剛彦, 1993, 「学習の跳躍——遠隔教育における学習と文化資本の変換」『教育学研究』第60巻第3号: pp.219-227.
- , 2008, 『学力と階層——教育の綻びをどう修正するか』朝日新聞出版。
- 児玉英靖・竹内麻貴・森田次朗・相澤真一, 2015, 「未来の社会科学ユーザを育てる社会科・公民科の授業づくり——仮説検証型アンケート調査法を応用した実践報告」『中京大学教師教育論叢』第4号: pp.11-28.
- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブラー

ニング』勁草書房.

Senge, Peter, 2006, *The Fifth Discipline : The Art and Practice of the Learning Organization (revised and updated edition)*, Doubleday. (=枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳, 2011, 『学習する組織』英治出版.)

Senge, Peter, Nelda Cambron-MacCabe, Timothy Lucas, Bryan Smith, Janis Dutton, Art Kleiner, 2012, *Schools that Learn : A Fifth Discipline Fieldbook for Educators, Parents, and Everyone Who Cares about Education*, Crowne Publishing, New York. (=2014, リヒテルズ直子訳『学習する学校——子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』英治出版.)